

「患者の人権と看護の倫理」に関する体験的学習の 効果の検討　：　実習前後レポートの内容分析から （報告）

著者	新井 龍，高田 直子，井村 香積，作田 裕美，遠藤 知典，坂口 桃子
雑誌名	滋賀医科大学看護学ジャーナル
巻	7
号	1
ページ	23-26
発行年	2009-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10422/154

報告

「患者の人権と看護の倫理」に関する体験的学習の効果の検討

—実習前後レポートの内容分析から—

新井龍¹ 高田直子¹ 井村香積¹ 作田裕美² 遠藤知典³ 坂口桃子¹

¹滋賀医科大学医学部看護学科基礎看護学講座 ²京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻 ³国際医療福祉大学

要旨

「基礎看護学実習Ⅰ」における学びの実態を明らかにするために、実習前後の課題レポートを内容分析した。キーワードを「看護」「倫理」「人権」「感じる・感情」「コミュニケーション」など13語に設定した結果、実習前レポートから323のフレーズが抽出でき、実習終了後レポートから288が抽出できた。実習前レポートでは、「現代社会の問題」が55と最も多く、次いで「障害者の人権への思い」が54であった。続いて障害者福祉に関連する「学生の経験」「社会への働きかけ」などであった。実習後のレポートでは、「施設スタッフと障害者との関係」に関するフレーズが51と最も多く、次いで「障害者への否定的感情の反省」「障害者と学生の関係」などであった。実習前後のレポートを比較すると、実習前は抽象的なフレーズが多いことが特徴で対社会的フレーズが多く見られたが、実習後では自身の行動や施設のスタッフに対する具体的なフレーズが増加していた。

キーワード 重症心身障害児者施設 人権 倫理 教育 看護

I 緒言

看護は、人間関係を基盤とし安全安楽を提供するために、常に相対的な倫理上の判断が繰り返される倫理的実践過程である¹⁾。2004年に文部科学省「看護学教育の在り方に関する検討会」の報告書「大学における看護実践能力の育成の充実に向けて」により、倫理の教育方法と評価が具体的に示された。また、2006年には、日本看護協会の第6回「看護基礎教育の充実に関する検討会」において「強化すべき教育内容」の一つとして「看護倫理」が挙げられ、倫理教育の必要性が強調されるようになった。その背景には、増加する医療事故に対する看護倫理のあり方、看護師の倫理的責務への指摘などが上げられる²⁾。

先行研究において看護学生に対する倫理教育に関する報告はあるが、基礎看護学における臨地実習に焦点を当てた倫理教育の研究は希少である。特に看護専門科目の履修前段階にある、1回生を対象とした倫理教育に関する研究は極めて希少である。看護学科1年次における臨地実習は、単に後学のための導入的な体験実習に留まらず、臨床において患者と触れ合い、患者との相互行為によって生み出された現象を教材として看護実践能力の基本を学習する貴重な授業である³⁾。本稿では、看護学科1回生を対象とした基礎看護学実習Ⅰの前後のレポートから、学生の学びを患者の人権と看護の倫理の感得に焦点を当てて比較検討した。

II 研究目的

患者の人権と看護の倫理について考える機会とした「基礎看護学実習Ⅰ」における学びの実態を明らかにすることを目的とした。

III 用語の操作上の定義

本研究では、以下のように用語を定義し用いた。

倫理：自己と他者との関係、人間関係において守られるべき内面的規範および尊重すべき価値

人権：人が生まれながらに持ち、不可侵であり、他人に譲渡不能である永久の権利。公共の福祉に反しない限り尊重される。

IV 研究方法

1. 実習概要

1) 実習内容

看護学科1回生を対象とした重症心身障害児者施設における見学(体験)実習である。事前学習として、糸賀一雄著『福祉の思想』を熟読した上で、実習施設長による特別講義を受講し、「病むこと・障害を持つことの意味」「病む人・障害を持つ人への看護の倫理」についてグループ討議を行った。その後、重症心身障害児者施設における臨地実習を3日間行った。

2) 実習施設概要

実習は重症心身障害児者施設「びわこ学園医療福祉センター草津」と「びわこ学園医療福祉センター野洲」の2施設にて実施した。両施設とも近江学園の創設者である糸賀一雄氏の「この子らを世の光に」という理念の下、医師、看護師、理学療法士、作業療法士、介護福祉士、ソーシャルワーカー等、医療・福祉の多職種が従事している。看護単位は両施設とも3看護単位であり、病床数は116床(草津)と138床(野洲)である。入所者の特徴は「厚生省研究班重症児分類」Ⅰ型からⅢ型に分類され、重度の肢体不自由と重度の知的障害を重複している人から、肢体と知的の片方のみに重度の障害を持った人

まで、多種多様な障害を抱える人々である。

2. 対象

本学看護学科1回生60名

3. データ収集方法

事前レポート（糸賀一雄：『福祉の思想』を読んで）と実習終了後レポート（実習における具体的体験とそれに伴う学び）を提出させた。

4. 分析方法

(1)『実習キーワード』の設定を行った。キーワード設定は基礎看護学実習感想文に関する先行研究を参考にしつつ当該実習の目的から「看護」「援助」「コミュニケーション」「関係」「経験」「患者」「障害者」「福祉」「倫理」「人権」「社会」「問題」「感じる・感情」とした。

(2)レポートから『実習キーワード』を含むフレーズを抽出した。

(3)抽出されたフレーズの内容と出現回数を実習前後で比較した。

5. 倫理的配慮

レポートは氏名・学籍番号を削除してコピーし、データベースに匿名性を持たせた。

V 結果

対象学生60名の実習前レポートと実習終了後レポートを内容分析した。

1. 実習前レポート

実習前レポートから『実習キーワード』を含むフレーズは、323抽出された。323のフレーズを意味の類似したテーマに分類した結果、以下の12のテーマに分類することができた。「現代社会の問題」は、55のフレーズによって構成され、最も多かった。次いで「障害者の人権への思い」が54であった。続いて「社会への働きかけ」が36フレーズあり、「学生の経験」、「障害者に対する偏見・不安」が共に31であった。さらに「福祉への思慮」が30あり、「障害者に対する認知」は25であった。比較的少数意見として、「歴史的背景」18、「自己の課題」15、「人間関係形成の構成要素」12、「日本独自の文化」9、「理想の社会像」7であった。また、5種の法律・制度などが引用されていた。

実習前のレポートでは、「障害者の人権への思い」に関するフレーズ以上に、「現代社会の問題」に関する記述が多く見られた。現代社会が抱える障害者に関する問題や福祉に関する問題を記述すると同時に、「歴史的背景」において、障害者に関する問題の歴史や日本の福祉の変遷について述べられていた。また、「学生の経験」において、現代社会への問題を自分の過去の経験から見出し、学生自身の問題として捉えていた。経験が乏しい学生は、テレビ等のマスメディアより得た情報を自己の経験として記述していた。さらに、「障害者に対する偏見・不安」において、図書の内容や過去の経験から、学生自身が障害

者に対し偏見を知らぬ間に持っていたという事実を認識していた。

学生たちは現代の社会に問題提起すると共に、「日本独自の文化」において、日本の文化の特徴を記述し、西欧文化との相違点や偏見との関連を記述していた。また、日本の文化的な特徴を踏まえ、障害者が抱える問題を社会の問題として捉えていた。さらに、「理想の社会像」において図書の内容を踏まえ福祉が充実した理想的な社会を記述した上で、現代社会の問題点との差を埋めるために、社会がどのように変わることが望ましいのか、「社会への働きかけ」「福祉への思慮」において記述すると共に、「自己の課題」において、看護学を学習する学生として何ができるのか記述していた。

課題図書を熟読した結果、理想的な福祉を記述すると共に、障害者の抱える現実的な問題や能力的な限界、秘められた可能性などを事実として受け止め、「障害者に対する認知」において記述していた。

2. 実習終了後レポート

実習終了後レポートでは、合計288のフレーズが抽出された。抽出されたフレーズは、以下の10のテーマに分類することができた。「施設スタッフと障害者との関係」に関するフレーズが51と最も多く、次いで「障害者への否定的感情の反省」が45、「障害者と学生との関係」が43であった。続いて「人間関係形成の構成要素」36、「障害者に対する認知」25、「自己の課題」22であった。比較的少数意見として、「失敗体験」18、「社会への問題提起」18、「認識の変化」15、「成功体験」15であった。引用された法律などは2種であった。

「施設スタッフと障害者との関係」において、学生はスタッフと障害者のかかわり方を観察し、コミュニケーション方法やケアの方法、障害者の人権に対する考えなどを記述していた。コミュニケーションをとるための手段やコミュニケーションをとる際に行う配慮、非言語的コミュニケーションの存在の発見について「人間関係形成の構成要素」として記述していた。学生は、スタッフが行うコミュニケーション方法を模倣し、「障害者と学生との関係」を築くと同時に、個別性や関心を持つことの重要性を発見し、個人の尊厳を尊重する方法を実践していた。実習を通して学生は障害者とかかわり、対象者の微細な変化に気づくことができたことを喜びとして捉え「成功体験」として記述していた。一方で個別性を考慮せずにコミュニケーションやケアを実施したことや、未学習の範囲である看護技術を実践できなかった場면을「失敗体験」として記述していた。これらの体験を踏まえた上で、「自己の課題」としてコミュニケーション技術の習得や、対象者への配慮などを個人的な課題として記述すると共に、障害者への偏見の存在や家族が抱える問題を、社会全体として取り組むべき課題として「社会へ

の問題提起」に記述していた。

グループ討議や振り返りを行うことで、障害者に対し不安な気持ちを持ち実習に臨んでいたことや、実習中にスタッフと障害者のかかわり方を観察し、障害者の人権について学習したことによって、偏見を持っていたことを再認識し、「障害者への否定的感情の反省」として記述していた。学生が当初持っていた障害者に対する否定的感情は実習期間中に障害者と触れ合うことで、同等の権利を有している存在であるという、肯定的な意見に変化していく過程を、「認識の変化」において記述するとともに、「障害者に対する認知」において、実習において体験した障害者の身体的能力の限界を事実として受け止め、秘められた可能性についても言及していた。

3. 実習前後のフレーズの変化

実習後に減少したテーマでは、社会に関するフレーズが減少していた。実習前のレポートにおいては、現代社会が抱える問題や考察した解決策などを含む対社会的な記述が多数見られたが、実習後のレポートにおいては著明に減少し、障害者とのかかわりに関する記述が増加していた。また、実習前に見られた歴史的背景を踏まえたフレーズや日本独自の文化的背景に関するフレーズは、実習後には見られなかった。

実習後に増加したテーマでは、学生が体験したことに関するフレーズや、コミュニケーションに関するフレーズ、障害者への偏見に関するフレーズであった。全体的にフレーズの内容を見てみると、実習前のレポートでは、学びえた内容や自己の課題などにおいて、対社会的で抽象的な記述であったが、実習後においては、スタッフと障害者、学生と対象者というように具体的な記述に変化していた。また、実習前では、学生自身が今まで経験してきた事象のフレーズの中に、テレビからの情報が含まれていたが、実習後において、自身の経験は実習時の体験のみを記述していた。コミュニケーションに関するフレーズは実習後に著明に増加し、単に看護技術としてのコミュニケーション方法を観察するのみに留まらず、対象者への配慮や意思の尊重、非言語的コミュニケーションや観察能力の重要性について記述されていた。障害者への偏見に関するフレーズでは、実習前は、自身が持つ偏見を社会一般的な意見として記述する傾向があったことと、課題図書を読んだことによって、自己の考え方や偏見を持っていた事実を認識していた。実習後においては、講義、視聴覚資料、実習における体験より、日常生活において自身が認識していなかった新しい偏見について具体的に記述していた。

実習前後に共通して抽出され、数の変化が少なかったフレーズとして、障害者の身体的能力の認知に関するフレーズや今後の課題に関するフレーズがあった。障害者の身体的能力に関するフレーズでは、数的には変化して

いないものの、実習前では、身体的能力の限界について記述が多く、実習後には、障害者が持っている可能性を肯定するフレーズへと変化していた。しかし、実習後においても、体験学習した障害者の身体的能力の限界を事実として受け止めるフレーズがあった。今後の課題に関するフレーズでは、フレーズの数の変化は少ないものの、内容は、対社会的で抽象的な記述から、実習後は、個人で行う課題が増加した。

引用された法律、制度などは実習前のレポートでは5種類であったのに対し、実習後は2種類であった。

表1. テーマ一覧

実習前のレポートのテーマ		実習後のレポートのテーマ	
現代社会の問題	55	施設スタッフと障害者との関係	51
障害者の人権への思い	54	施設スタッフと障害者との関係	45
社会への働きかけ	36	障害者と学生の関係	43
学生の経験	31	人間関係形成の構成要素	36
障害者に対する偏見・不安	31	障害者に対する認知	25
福祉への思慮	30	自己の課題	22
障害者に対する認知	25	失敗体験	18
歴史的背景	18	社会への問題提起	18
自己の課題	15	認識の変化	15
人間関係形成の構成要素	12	成功体験	15
日本独自の文化	9		
理想の社会像	7		
引用された法律・制度	5	引用された法律・制度	2

VI 考察

1. 障害者に対する意識の変化

学生は、実習前の講義や視聴覚教材の視聴によって、現実問題として障害者が抱える問題を知り、自身が描いていた障害者像が偏見に基づくイメージであることに気づくことができたが、施設実習直前まで障害者に対して不安や偏見を持っていたことが明らかになった。その後、学生が抱えていた不安や偏見は、障害者と触れ合うことによって克服できたといえる。さらに、障害者と触れ合う体験を通して、障害者の人権は自分と同等であるが、身体的能力に差があるという事実を客観的に判断していた。また、障害者の身体的能力を補う方法の開発を自己の課題として見出すなど今後の学習に向けた動機付けにつながったと考えられる。

2. 問題意識の変化

看護科1回生の学生は、専門的な知識や技術を学習する前の段階であり、実習前では、障害者や福祉が抱える問題を自身の経験から具体的に示すことができず、課題図書が指摘した社会に対する問題を踏襲して記述したものと考えられる。また、経験が乏しい学生は、マスメディアから得た情報を自身の経験として補いながら記述していた。そのため、対社会的なフレーズの記述が多く、抽象的な記述となったと考えられる。社会が抱える問題

の原因について、日本の文化的背景である「世間」の影響や集団心理の影響、人権教育のあり方についての記述も見られた。上記の原因について学生は、社会の抱える問題であると考え、自己の課題について、具体的に自身が実施できる行動にまで抽象度を下げた記述は少数であった。さらに、障害者の人権に対する意識では、著者が考える障害者の人権への考え方を知識として得つつ、学生が今まで取ってきた福祉に対する言動を内省し、個人の尊厳や人権の尊重などを考える機会となったと考えられる。

2 回生までを対象とした先行研究^{4) 5)}では、プライバシーの保護や安全・安楽に関する内容など、看護実践時における配慮を倫理的問題として挙げられていたが、専門的知識を獲得する前段階である1回生のみを対象とした場合、看護技術に関わる倫理的課題よりも、自分が生活する社会における問題に対する意識が高かったといえる。しかし、実習において対象者とかかわり、スタッフと対象者のかかわる場面を観察したことにより、人間対人間における倫理的問題に問題意識が変化したと考えられた。さらに、自身が障害者と関わり、コミュニケーションを図り、障害者に対するケアを経験したことにより、問題意識も自身の行動における問題へと変化した。自身の行動に問題が見出せたことにより、自己の課題についても自身の行動が実習前より具体的な内容を記述できたと考えられる。

今回の実習での学びは、障害者と関わることにより、コミュニケーション技術やケアを実践する際の配慮など、看護技術実践時における倫理的問題の気づきのみにとどまらなかった。実習前に糸賀氏の障害者の人権に対する意識⁶⁾を学習したことにより、看護師が行う倫理的配慮は、看護実践時の技術としての配慮だけでなく、大谷氏が述べる「医療者として持つべき人権思想⁷⁾」として、その必要性を見出していた。

3. 倫理的思考の発達に及ぼす実習施設の影響

道徳的価値観の発達は段階を踏んで成長し、発達過程において重要他者の影響を受けることが報告されている⁸⁾。基礎看護学実習前の事前学習としてのロールプレイが有効であるとする報告では、看護技術を実践する際の倫理的配慮に言及されていた⁹⁾。また、学生は看護教員を倫理教育のロールモデルとして捉えており、モデリング学習を行っている¹⁰⁾ことも指摘されている。

実習後のレポートに「施設スタッフと障害者との関係」をとらえたフレーズが多数みられたことから学生は、実習におけるロールモデルを教員ではなく、施設スタッフに見出していることが分かる。見学実習において、教員が学生に示すロールモデル行動の重要性と同時に、ケアを実践する施設スタッフの倫理観が、学生に強い影響を与え重要であると考えられる。したがって、実習施設の

選定が非常に重要となると考えられた。

VII 結論

「基礎看護学実習Ⅰ」前後に提出されたレポートの内容分析から学びの実態を検討し、以下のことについて明らかにできた。

1. 実習前レポートでは、323のフレーズが抽出でき、12のテーマに分類することができた。「現代社会の問題」が55と最も多く、次いで「障害者の人権への思い」であった。実習後のレポートでは、288のフレーズが抽出でき、10のテーマに分類することができた。「施設スタッフと障害者との関係」に関するフレーズが51と最も多く、次いで「障害者への否定的感情の反省」であった。
2. 実習前後のレポートを比較すると、実習前は抽象的なフレーズが多いことが特徴で対社会的フレーズが多く見られたが、実習後では自身の行動や施設のスタッフの言動に対する具体的なフレーズが増加していた。
3. 上記1.2.より、倫理・人権に関する実習では、施設の選定が非常に重要であることが示唆された。

VIII 謝辞

実習において多大なるご協力を賜りました『びわこ学園医療福祉センター草津』『びわこ学園医療福祉センター野洲』の障害者と職員の皆様に、厚くお礼申し上げます。

IX 参考文献

- 1) 大日向輝美:看護倫理教育における歴史性・社会性の問題. 91-108. 教授学の探求. 1. 2004
- 2) Anne J. Davis: HIV 混入血液製剤に関するいくつかの倫理的問題: 日本の場合. 32-43. 看護. 48(15). 1996
- 3) 杉森みどり, 舟島なをみ: 看護教育学 第4版. 249-268. 医学書院. 東京. 2005.
- 4) 大日向輝美, 堀口雅美, 酒井英美, 木口幸子, 田野英里香, 稲葉佳江: 初期看護学実習における学生の倫理的体験に関する検討. 35-42. 札幌医科大学保健医療学部紀要(5). 2002.
- 5) 佐藤友美: 看護学生が捉えた倫理的問題-基礎看護学実習の体験の中で-. 92-95. 日本看護科学会誌. 25(3). 2005.
- 6) 大谷藤郎: 医の倫理と人権-共に生きる社会へ-. 82-89. 医療文化社. 東京. 2005.
- 7) 糸賀一雄: 福祉の思想. 81-101. 日本放送出版会. 東京. 1968.
- 8) 西平(訳): 子供の発達と教育 6 青年発達段階と教育 3. 297. 岩波書店. 東京. 1979.
- 9) 窪田好恵, 川崎朋恵, 坂田清美, 竹村淳子, 田中多恵子: 基礎看護学実習前のロールプレイングによる倫理教育の効果. 54-56. 第33回看護総合. 2002.
- 10) 村上みち子: いま, 考えてほしい倫理の問題 看護学教員の倫理的行動. 777-782. 臨床看護. 2006.